

「二つのアメリカ」文学

—ホーソーントンとラテンアメリカ作家の近似値—

早 瀬 博 範

Literature of the Two Americas:
The Affinity between Hawthorne and Latin American Writers

Hironori HAYASE

Summary

This paper aims to try to find the reasons why Latin American writers, from Borges to recent young writers, have been keenly interested in and given high admiration to Nathaniel Hawthorne's works. Through a comparative analysis of Hawthorne's and Latin American texts, some affinity can be found between them. Hawthorne's "romance" and Latin American writers' "Magical Realism" have shared important processes of self-definition in the New World against the European tradition and culture. This conclusion importantly and interestingly may suggest that the two Americas have common literary elements in the West hemispheric context.

はじめに

ラテンアメリカ文学において、ナサニエル・ホーソーンの人気と評価は高い。ラテンアメリカ文学の大御所ホルヘ・ルイス・ボルヘスは、アメリカ文学作品を含めて世界の文学をラテンアメリカ諸国に紹介する際に、ホーソーンの作品を絶賛し、特筆している。このようなボルヘスの賛辞が影響してか、多くのラテンアメリカ文学の作家たち—例えば、アレホ・カルペンティエール、ピオイ・カサーレス、ガルシア・マルケス、カルロス・フェンテス、マリオ・リョサたち—の作品には、その本質の部分でホーソン作品と強い親近性を感じざるを得ない。これは単に影響と言うよりも、本来、両者が持ち合わせている特質と言った方が正しいかもしれない。

さらに、最近では、まさしくホーソーンに触発されて作品を書いている作家も出現している。ホーソーンの「ウェイクフィールド」に触発され、短編「ウェイクフィールドの妻」(1999)を書いたエデュアルド・ベルティヤ、『若きナサニエル・ハーソーン』(*El Joven Nathaniel Hathorne* 2012)と題する小説を発表したヴィクトル・サバテである。もはや、これはホーソン人気と言うより、ホーソン神話に近い。見方

を変えれば、19世紀中葉の北アメリカ文学が、20世紀後半から現代のラテンアメリカで再燃し、人気を博していると言える状況である。

なぜホーソーンはこのようにラテンアメリカ作家に人気があり、かつ高い評価を得ているのだろうか。歴史や文化、時代風潮、風土、精神性などにおいて、両者に何らかの本質的な親近性や類似性があるのだろうか。本論では、romance、Magical Realism という2つの語句をキーワードにしながら、北アメリカと南アメリカという「二つのアメリカ」文学の近似値について、ホーソーンを架け橋として探りたい。

1. ラテンアメリカ文学におけるホーソーンの受容

ラテンアメリカの作家¹たちにとって、いかにホーソーンという北アメリカの作家の評価が高く、しかも強い影響を与えているかを概観しておきたい。それは何と言っても、ラテンアメリカ文学の大御所であるボルヘス（1899–1986）が、ホーソーンを高い賛辞とともに紹介したことが大きく影響していると言ってよい。1967年に出版された『北アメリカ文学講義』でボルヘスは、フランクリン、クーパー、ポー、ホイットマン、メルヴィルといった19世紀アメリカの主要作家たちを紹介しているが、その中で彼は「長編・短編作家ナサニエル・ホーソーンはこれまで紹介してきたどの作家よりも重要である」（41）と特筆している。さらに、ホーソーン、ポー、ロンドン、ジェイムズ、メルヴィルの合わせて20編の短編を収録した『新編バベルの図書館・第一巻』でも、「『ウェイクフィールド』はホーソーンの短編のうち最高傑作であり、およそ文学における最高傑作の1つと言っても過言ではない」（17）と絶賛している。また、講演集『続審問』では、ホーソーンを優れた短編作家だと評し、「ウェイクフィールド」に加えて、「『地球の大燦祭』はホーソーンのほとんど完璧と言っているいい譬話の1つです」（107）と詳細な作品紹介をしている。

また、1982年にノーベル文学賞を受賞したガルシア・マルケス（1928-）は、フォークナーをはじめとして、北アメリカ文学との影響がしばしば論じられる作家であるが²、彼も、その随筆集『生きて、語り伝える』の中で、「ナサニエル・ホーソーンの『七破風の館』……は私の中に永久に刻印を刻んだ」（469）と述べている。エンリーケ・ピタ＝タマスも、『バートルビーと仲間たち』の中で、「『ウェイクフィールド』と『バートルビー』——この二人がわたしの最良の友人になってくれるのなら、何を差し出してもいいと思っている」（120）と言うほどホーソーンに強く魅了されている。

賛辞を述べるに留ることなく、近年では若い作家の中には、ホーソーン作品に強く感化されて自分の作品を創作した作家もいる。エデュアルド・ベルティ（1964-）の「ウェイクフィールドの妻」（1999）は、ホーソーンの「ウェイクフィールド」の中の夫に逃げられた妻の物語として書き直している。彼は、ホーソーンの *American Notebooks* のスペイン語訳を出版するほどホーソーンに傾倒しているが、中でも「ウェイクフィールド」は心掻き立てる存在だったのだろう。

さらに、スペイン在住のヴィクトル・サバテ（1976-）の（『若きナサニエル・ハーソーン』（*El Joven Nathaniel Hawthorne*, 2012）は、ホーソーン作品のパロディとも言える作品を書いている。これは、スペインの作家志望の男性が、作家としての苦悩や大変さ、それと文学とは何かと悩み、時空を超えて語る物語である。小説のタイトル「若きナサニエル・ハーソーン」だけでなく、作品の各章のタイトルを見るだけでも、ホーソーン作品や作家ホーソーンとの関係は明白である。本作品は、英語版も日本語版も未だ出版されていないので、少し中身の紹介もしておきたい。

第1章「外套姿の青年」

主人公ナサニエルはスペインの大学卒業前に、米国のボウディン大学（＝ホーソーンが卒業した大学）に留学。その図書館（Hawthorne-Longfellow Library）で「黒い外套の若者がアメリカ文学の

棚の辺りをうろついているのを何度か見かける。忘れ物をし、自分が書いた短編の原稿が消えていることに気づく。

第2章「ヒギンボタム氏の災難」

ナサニエルは、あるとき、ホーソーという作家の書いた『トワイヌ・トールド・テールズ』を読んでいたら、以前どこかで読んだことがあると感じる。それは自分が10年前に書いた短編と奇妙に酷似していることに驚く。タイトルはホーソーの短編「ヒギンボタム氏の災難」と同じである。

第3章「若きナサニエル・ハーソー」(主人公が書いた作品として掲載)

悪魔に魂を売り、自分の作品が未来でどれだけ評価されているかを見に行く物語。そのためにナサニエルは、悪魔の待つ森へ入っていく。タイトルもストーリーも、ホーソーの短編「若きグッドマン・ブラウン」と類似の物語。

第4章「3階の部屋」

作家ホーソーの部屋と同じ3階での物語。ホーソーについて調べ、『緋文字』の「税関」の部分を読んで、主人公は作家一本でやっていこうと決心する。

第5章「幸せは次々とやってこない」

タイトルは、ホーソーの『アメリカン・ノートブックス』の中にある“Happiness has not succession of events.”という言葉。デュマとホーソーの盗作論争の物語。

第6章「トワイヌ・トールド・テールズ」

ホーソーは、悪魔と契約を結んで、150年後の現在に現れる。この本をボードン大学の図書にホーソーが読めるように置いておこう。タイトルは、まさしくホーソーの『トワイヌ・トールド・テールズ』と同名。

ここまでやると、完全にホーソーやホーソー作品のパロディーと言えるだろうが、作家は「これらのページは、目に見えない友へのオマージュ(“homenaje”)であり、敬意(“tribute”)を示すものである」と述べている。

以上のように、ラテンアメリカ文学作家からのホーソーの評価は高く、それは現在にまで至り、単に影響以上のインパクトを与え、作家たちにインスピレーションすら与え続けていると言えるほどの受容ぶりである。

2. ホーソー作品とラテンアメリカ作品の親近性

なぜ、ホーソー作品がラテンアメリカの作家たちからこのように高く評価されているのだろうか。ホーソー文学のどのような点がラテンアメリカ文学に受け入れられる要素なのだろうか。この点に関して、本章では、ホーソーの作品が本質的にロマンスであること、そして、そのロマンス性とラテンアメリカ文学の本質的特徴である「魔術的リアリズム」に多く類似点が認められることを論証することで、両者の親近性、さらにはラテンアメリカ作家のホーソー文学への高い関心の核心を明らかにしたい。

(1) ホーソーのロマンス

「偉大なるアメリカ小説のほとんどがロマンスである」(*The American Novel and its Tradition*, Introduction xii)と言ったのはRichard Chaseだが、英国のような歴史も複雑な人間関係からなる社会構造もたないアメリカでは、小説(novel)でなくロマンス(romance)が発達した。その代表者であるホー

ソーンは、代表作『緋文字』(*The Scarlet Letter*)において、ロマンスの本質を以下のように述べている。

Moonlight, in a familiar room, falling so white upon the carpet, and showing all its figures so distinctly, —making every object so minutely visible, yet so unlike a morning or noontide visibility,— is a medium the most suitable for a romance—writer to get acquainted with his illusive guests.... Thus, therefore, the floor of our familiar room has become a neutral territory, somewhere between the real world and fairy—land, where the Actual and the Imaginary may meet, and each imbue itself with the nature of the other. Ghosts might enter here, without affrighting us. (30-31)

ロマンス作家は、「現実世界」(real world)と「おとぎの国」(fairy-land)のどこか中間に位置する「中立地帯」(the neutral territory)を作品中に構築し、そこでは、「現実的なもの」(the Actual)と「創造的なもの」(the Imaginary)が混ざり合い、結果、例えば、幽霊が出てきても全くおかしくない世界となるのである。ロマンスの世界は、現実にはあり得ない小説とは違って、かなり自由度があり、そこでは限度こそあれ、作家の想像力の羽を大いに広げることができる。よって、本作品でも遠い昔に税関の事務机に残された緋文字が作家の想像力を最大限に刺激し、不倫という罪を犯す敬虔な牧師、世間の嘲笑をもとめない強い意志のシングルマザー、悪魔のような元夫など、極めてアレゴリカルな人物を生み出し、彼らの周りでは超自然的な出来事も起こりうる世界の構築を可能としている。

さらに、『七破風の屋敷』(*The House of the Seven Gables*)の序文では、以下のようにロマンスが定義されている。

The former—while, as a work of art, it must rigidly subject itself to laws, and while it sins unpardonably, so far as it may swerve aside from the truth of the human heart—has fairly a right to present that truth under circumstances, to a great extent, of the writer's own choosing or creation. If he think fit, also, he may so manage his atmospherical medium as to bring out or mellow the lights and deepen and enrich the shadows of the picture. ("Preface" to *The House of the Seven Gables* 1)

ホーソーンによれば、ロマンスとは現実という壁に制限されることなく、自らが選び想像した環境のもとで、人間の感情の真理をかなり自由に描く権利(right to present that truth under circumstances, to a great extent, of the writer's own choosing or creation)を有しているのである。さらに、実際には起こりえない「驚くべき事柄」(the Marvelous)も微妙な儚く消える風味(flavor)として混ぜる方が間違いなく賢明だと、ロマンスの魅力を説明している。この言葉に裏打ちされるように、本作品でも、以下の描写にあるように、屋敷に幽霊が出て来ても全く不思議ではないような雰囲気を作り出されている。

After the reputed wizard's death, his humble homestead had fallen an easy spoil into Colonel Pyncheon's grasp. ... His home would include the home of the dead and buried wizard, and would thus afford the ghost of the latter a kind of privilege to haunt its new apartments, and the chambers into which future bridegrooms were to lead their brides, and where children of the Pyncheon blood were to be born. (*The House of the Seven Gables* 8-9)

魔女裁判の犠牲者として亡くなったその人が所有していた跡地に、その裁判に関わったピンチョン大佐の屋敷が建てられるという異様な経緯を持つ一家にとって、その魔法使いの呪いは、何世代にも渡って祟ることになるという設定がなされる。ロマンスならではの設定と言える。

以上のように、ホーソー文学の本質はロマンスであり、そこでは、現実と創造的なものが混ざり合い、写実描写では浮き彫りにすることができない、人間の本性や社会の本質が描き出されてくる。

(2) 魔術的リアリズム

「魔術的リアリズム」は、ラテンアメリカ文学を形容する用語としてしばしば用いられるが、鼓らラテンアメリカ文学の専門家が警告するように、「幻想文学」と「魔術的リアリズム」を同一視できるものではなく、しかもすべてのラテンアメリカ文学が「魔術的リアリズム」ではない。鼓は、アンデルソン＝インベルの『幻想文学——＜魔術的リアリズム＞と＜驚異的現実＞』に依拠しながら、「魔術的リアリズム」を「幻想文学」と区別し、以下のように定義している。

＜魔術的リアリズム＞では＜奇異なもの＞が重要な働きを果たす。それを標榜する物語では物、人間、事件、といったもののすべてが合理的で、はっきりとそれと判別できるが、しかし読み手に奇異感を与えるために、故意に人物や物事の目に見える合理的な部分が無視され、納得のいく説明が差し控えられている。＜魔術的リアリズム＞は「現実の溶解（魔術）と現実の模写（リアリズム）の中間に」あり、「そこで生じる出来事は現実でありながら、非現実の幻覚を生みだす」のである。(62)

「魔術的リアリズム」とは、超自然や不可解な現象を可能とする「幻想文学」とは区別すべきである。*Magical Realism: Theory, History, Community* の中で、Zamora も以下のような説明で、やはり現実世界の描写の重要性を説く。

magical realist texts share (and extend) the tradition of narrative realism: they, too, aim to present a credible version of experienced reality. The crucial difference is that magical realist texts amplify the very conception of “experienced reality” by presenting fictional worlds that are multiple, permeable, transformative, animistic. (500)

Zamora によれば、信じられる形での「経験される現実」(experienced reality) を描写するのが目的で、変幻自在で多面的なフィクションの世界を提示することで、その「経験される現実」という概念を拡大させるのである。

また『魔術的リアリズム—20世紀ラテンアメリカ小説』の中で、寺尾は「魔術的リアリズム」の手法によって「普通には見えない現実世界の隠れた側面を明らかにする」と、以下のように述べている。

魔術的リアリズムは最終的に現実世界から独立した架空世界を作り上げる。「独立した」といっても、現実から完全に切り離されたという意味ではない。逆説的に聞こえるかもしれないが、小説内に作り上げられる空想世界が自律した世界であるからこそ、日常的現実世界を新たな視点から捉える拠り所となる。(中略) 小説内に描かれた（一見すると）常軌を逸した事件は、象徴的に現実世界を照射し、普通には見えない現実世界の隠れた側面を明らかにする。(129-130)

以上の説明を具体化するように、多くの批評家がラテンアメリカの文学の「魔術的リアリズム」の傑作と称するガルシア・マルケスの『百年の孤独』には、死者が頻繁に登場する架空の街マコンドを舞台にブレンディア家の栄華と衰退の百年が壮大に描かれ、そこでは、奇怪なこと、超自然現象、荒唐無稽なことなど、何でもありの世界が繰り広げられる。以下の描写にあるように、コマンドの町は、呪われた一家の歴史を示すように、ジプシーの呪文が唱えられ、同じような名前が代々後生大事に受け継がれるが、同時にその家にまつわる罪も継承されていく。

マコンドも当時は、先史時代のけもの卵のようにすべすべした、白くて大きな石がごろごろしている瀬を、澄んだ水が勢よく落ちていく川のほとりに、葦と泥づくりの家が二十軒ほど建っているだけの小さな村だった。ようやく開けた新天地なので名前のないものが山ほどあって、話をするときは、いちいち指ささなければならなかった。毎年3月になると、ほろをぶら下げたジプシーの一家が村はずれにテントを張り、笛や太鼓をにぎやかに鳴らして新しい品物の到来を触れて歩いた。(12)

この作品で取り扱われる「非現実的なこと」や「超自然現象」などは、この家にまつわる逃れがたい呪いの表れであり、作家は目に見えない「長年の呪い」の現実を、このような非現実的なことを描くことで、読者に気づかせているのである。その点で、以下の高林の説明は十分納得のいくものである。

魔術的リアリズムの作品においては架空の人間や世界の創造ではなく、人間とそれを取り巻く環境との間に存在する秘められた関係を発見することこそ重要である。現実の驚異的なものの存在が魔術的リアリズムを生み出したのである。(43)

以上、見てきたようにホーソーンの「ロマンス」とラテンアメリカの作品の特徴である「魔術的リアリズム」には、本質的な類似点が存在していることがわかる。Zamora もその類似点について、次のように説明している。

Are magical realism and romance the same fictional mode? Perhaps nineteenth-century U.S. romance is an early and local flowering of twentieth-century magical realism Borges' appreciation for Hawthorne points to the similarities of magical realism and romance, rather than their differences, and to their shared project: the expansion and redefinition of our conceptions of subjectivity against the ideological limitations of Cartesian (and Freudian) consciousness, Hegelian historicism, scientific rationalism. (*Magical Realism* 518-519)

Zamora の指摘通り、「ロマンス」と「魔術的リアリズム」は、合理的な視点だけでは見えない現実の本質を浮き彫りにする小説技法として用いられている。ボルヘスがホーソーンを賞賛する理由もその点にあると言えるのだろう。

ホーソーンの「ロマンス」もラテンアメリカの「魔術的リアリズム」もどちらも、現実世界を全く別の視点から眺めるための手法であり、その別の視点は現実世界では起こりえない様々な異空間を創造する³。それによって、現実世界への疑問、疑念が呈せられたり、これまで見えていなかった人間や社会の本質が浮き彫りにされるのである。その結果、ラテン文学に関しては、西洋文明の打ち立てた合理主義や資本主

義への批判につながる対立軸すら生んでいて力強さがある⁴。この点は、ホーソーンのロマンスにはないものである。

V. New World Literature in a Hemispheric Context

ここまで、ホーソーンとラテンアメリカの親和性を見てきたが、ではなぜ両者に共通の考え方が生まれたのだろうか。その点について、本章では、両者がヨーロッパから見たら同じ新大陸であるという点から考えてみることにする。Richard Chase は、アメリカではヨーロッパと違ってロマンスが受け入れられ、それがアメリカ的なものを描くのに最適だったと言う。

The American novel has usually seemed content to explore, rather than to appropriate and civilize, the remarkable and in some ways unexampled territories of life in the New World and to reflect its anomalies and dilemmas. It has not wanted to build an imperium but merely to discover a new place and a new state of mind. (5)

アメリカという環境は、歴史的にも地理的にもヨーロッパとは異なるものであるために、そこでは、従来のヨーロッパ的な価値観や感性ではなく、「新世界での前例のない人生の領域」(unexampled territories of life in the New World)を探求し、アメリカ独自の新たな特異性やジレンマを映し出そうとした。そのためには、ヨーロッパ、特にイギリス文学の主流である「小説」ではなく、「ロマンス」が相応しかったのである。つまり、ロマンスは新大陸を描くのに最もふさわしい表現手法だったのである。

ラテンアメリカ文学の先駆者で、「魔術的リアリズム」の騎手と言えるアレホ・カルペンティエルは、ハイチ革命を描いた『この世の王国』の中で同様のことを述べている。

現実の驚異的なものがこんなにたくましく生きているのは、なにもハイチだけに限らない。これは天地創造説ひとつ見てもまだ明らかになっていないアメリカ大陸全体が、受け継いだ共有の遺産なのだ、と。(中略)ここに語られている数々の事件のドラマティックで特異な性格や、ある時、カブ市の魔術的な街角で互いに顔を合わせる人たちの幻想的と言うしかない振る舞いから見て、この物語はヨーロッパでは決して考えられないものであり、それゆえ一切が驚異的なものになっている。しかし、物語全体は小学校の教科書に出ている道德教育のお話に劣らないほど現実的なものである。アメリカ大陸の歴史とは一切が、現実の驚異的なものの記録ではないだろうか。

(15-18)

ここで、カルペンティエルがハイチで目にした「現実の驚異的なもの」は「アメリカ大陸全体が受け継いだ共有遺産なのだ」と、アメリカを二つの新大陸として捉えており、それは「ヨーロッパでは決して考えられないもの」と、その特異性を述べている。

さらに、Zamora は、ホーソーンもボルヘスも自分たちがいる新大陸の現状への懐疑と反発があり、その点で両者は同じ悩みを抱えていたと分析している。

Like Borges, Hawthorne was skeptical about American cultural relations to Europe: like Borges, he was aware of his belated and adoptive status as a New World writer. Because neither Borges nor Hawthorne used indigenous culture to any significant extent in their definitions of America, ...

both felt the lack of a significant American past when compared to Europe's. And both worried about the present. Hawthorne opposed the prevailing mid-nineteenth-century ideologies of individualism and nationalism, as Borges, eight decades later, opposed similar ideologies in Perón's Argentina.

Hawthorne foregrounds America's colonized relationship to Europe by setting many of his works in the colonial past. In this novel and throughout Hawthorne's work, one senses his anxiety about (and longing for) past and future ideals: his nostalgia for the lost innocence of the New World, his wistful desire for an ideal realm that the New World might yet become. This romantic longing, projected both backward and forward in time and space, is also present in contemporary magical realism. (*Magical Realism* 510)

Zamoraによれば、両者は新大陸で「失われた無垢へのノスタルジア」(nostalgia for the lost innocence)があり、そのロマンティックな希求が、一方は「ロマンス」へ、他方は「魔術的リアリズム」として現れたということである。

このように南北アメリカアメリカを一つとしてとらえる Zamora は、両者とも新大陸に来て新たな“self-definition”が迫られ、同様のことが文学の中でも起こったとみている。よって、両者は類似の自分探しの過程が存在し、しかも対ヨーロッパという点でも共通することになる。

we discover a parallel between earlier U.S. literary experience and current Latin American literary attitudes. Literature still matters in the complex political process of self-definition in Latin America as it has largely ceased to in the United States. (*Writing the Apocalypse* 183)

同じように、両大陸を一つのアメリカと考える Firmat は、“Do the America have a common Literature?”という論文の中で、西半球に位置する新大陸の人々は、英語を使っている、それが土地に遭わないために外国語のように違和感を感じていると述べ、ヨーロッパを軸に、南北アメリカが共通の感情を共有していることを示唆している。そのような違和感は、マルケスの『百年の孤独』の登場人物も、ホーソーンの『大理石の牧神』のミリアムも抱いていると指摘する。

Because in the Western Hemisphere the languages of literary discourse are, almost without exception, of European origin, the New World writer is never fully at home in his speech. His mother tongue is always a foreign tongue, a tongue that did not emerge from the reality which it now tries to name.

.... Notwithstanding the obvious differences, Cooper's batty naturalist and García Márquez' gypsy seer have something in common, since they both serve to point out the gap between the New World and the old words.

A more general manifestation of this dilemma takes the form of what I would call the typical American epiphany. In Hawthorne's *The Marble Faun*, there comes a moment when the heroine, Miriam, realizes that her self-portrait is actually a copy of a sixteenth-century painting. A similar epiphany occupies the last pages of *One Hundred Years of Solitude*, when the last Buendía, upon deciphering Melquíades' manuscript, discovers that the family's fate has already been

sealed, that even the act of decipherment has been foretold in the manuscript: his *nueva novela* turns out to be an old story. (Firmat 11-13)

以上のように、ヨーロッパを対抗軸として構築されていく南北アメリカが求める「自己定義」は、自ずと類似した要素を帯びてくるものと言える。

まとめ

昨今のラテンアメリカ作家のホーソーへの高い関心と評価の原因をたどっていくことで、ホーソーの唱える「ロマンス」と、ラテンアメリカ作家の特徴である「魔術的リアリズム」との間に共通の概念を見出すことができた。確かに北アメリカはアングロサクソン系で、南アメリカはラテン系で文化的にはかなりの違いはあるが、これらの手法は、両者が歴史的に見て、対ヨーロッパとして自らの土地やその中で新たな生活を描くために、独自に生み出された表現手法である。このように、時代的には80年ほどの違いがあるが、南北アメリカに明確な共通項が見出すことができ、新たな「アメリカ文学」の枠組みの可能性が出てきたことになる⁵。

注

- ¹ 本論で言う、「ラテンアメリカ文学」について定義しておく必要がある。本論では、ラテンアメリカ圏（メキシコ、西インド諸島以南のアメリカ大陸）で書かれた、及びその出身者による文学とした。ただ、日本では主にポルトガル語圏であるブラジルを除いたスペイン語圏の文学を指し、さらにスペイン本国に居住している作家も入れることが多いので、それに従った。
- ² フォークナーとラテンアメリカ作家とを扱った論文としては、若島「フォークナーとラテンアメリカの作家たち」、岡庭「辺境の精神—フォークナーと“アメリカ”覚書」、野谷「フォークナーとラテンアメリカ文学」などがある。
- ³ これは、ある意味、現実世界を「異化」(defamiliarization)させているとも言えるかもしれない。
- ⁴ この点に関し、高林は「西欧的な論理や規範にもとづく＜文明と野蛮＞の枠組みで書かれた20世紀初めまでのラテンアメリカ小説は、＜西欧的な（＝文明）＞観点に立つて＜中南米的な自然や社会（＝野蛮）＞を対立的・否定的に描きだした。これに対し＜魔術的リアリズム＞の作品は中南米の自然や文化の独自性を詩の分野で謳いあげたモデルニスモの流れを受け継いで、西欧合理的な論理やものの見方の有効性を問い返すことでラテンアメリカ的現実（歴史や社会・文化）への公的な認知を迫るもの」(47-48)と述べている。
- ⁵ Zamora は、その著 *Writing the Apocalypse* において、現代のアメリカ文学もラテンアメリカ文学と共通性が高いと主張する。また Hart も、『百年の孤独』とイザベル・アレンドの『亡霊の家』、そしてトニー・モリスンの『ピラヴィッド』が「魔術的リアリズム」だと、その共通性を論じている。

Works Cited

- 岡庭昇「辺境の精神—フォークナーと“アメリカ”覚書」『ユリイカ』11 (1979): 196-200.
 カルペンティエル、アレホ『この世の王国』(1949) 木村榮一・平田渡訳 水声社 1992.
 高林則明「ラテンアメリカ文学と＜魔術的リアリズム＞」『世界文学』97号 (2003-07): 42-48.
 鼓直「幻想文学と魔術的リアリズム—アンデルソン＝インベルとラテンアメリカ文学のなかで」『新日本文学』46 (1991-07): 59-63.
 寺尾隆吉『魔術的リアリズム—20世紀のラテンアメリカ小説』水声社 2012.
 野谷文昭「フォークナーとラテンアメリカ文学」『ユリイカ』29 (1987): 128-131.

- ビタ＝マタス、エンリーケ『バートルビーと仲間たち』木村榮一訳 新潮社 2008.
- ベルティ、エデュアルド「ウェイクフィールドの妻」(1999) 青木健史訳『ウェイクフィールド／ウェイクフィールドの妻』柴田元幸・青木健史訳 新潮社 2004.
- ボルヘス、ラホルヘ・ルイス『北アメリカ文学講義』柴田元幸訳 国書刊行会 1967.
- 『新編バベルの図書館 1 アメリカ編』(1944) 土岐恒三訳 国書刊行会 1942.
- 『続審問』(1952) 中村健二訳 岩波書店 2009.
- マルケス、ガルシア『生きて、語り伝える』旦敬介訳 新潮社 2009.
- 『百年の孤独』(1967) 鼓直訳 新潮社 2006.
- 若島正「フォークナーとラテンアメリカの作家たち」『フォークナー』3 (2001): 33-42.
- Chase, Richard. *The American Novel and its Tradition*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1957.
- Firmat, Gustavo. "Do the Americas Have a Common Literature?" LACC Occasional papers series. *Dialogue* (1987): 1-15.
- Haney, Kathleen. "The Unity of What We Can Know."
http://www.mullasadra.org/new_site/english/Paper%20Bank/Western%20Philosophy/Hany.htm
- Hart, Stephen M. "Magical Realism in the Americas: Politicised Ghosts in *One Hundred Years of Solitude*, *The House of the Spirits*, and *Beloved*." *Journal of Iberrian and Latin American Studies* 9. (2003): 115-123.
- Hawthorne, Nathaniel. *The House of the Seven Gables*. 1851. Centenary Edition. Columbus: Ohio State UP, 1965.
- . *The Scarlet Letter*. 1850. New York: Norton, 1978.
- Sabaté, Victor. *El Joven Nathaniel Hathorne*. Barcelona: Rayo Verde Editorial, 2012.
- Zamora, Lois Parkinson. "The Usable Past: The Idea of History in Modern U.S. and Latin American Fiction." *Do the Americas Have a Common Literature?* Ed. Gustavo Firmat. Durham: Duke UP, 1990. 7-41.
- . *Writing the Apocalypse: Historical Vision in Contemporary U.S. and Latin American Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- & Wendy B. Faris, eds. *Magical Realism: Theory, History, Community*. Durham: Duke UP, 1995.